

洋陶磁器コレクションのうちKPMを巡って

KPM—即ちKönigliche Porzellan Manufaktur Berlin, 略してKPM、訳してベルリン王立製磁工場。その頭文字を取った略称である。〈ベルリン窯〉として膾炙されることもあり、そこから産出される磁器類を指す。器物の糸底に染付で記された「王笏」の標徴によってその製品であることが判る。この「王笏Szepter(deut.); Sceptre(eng.)」は、中世以来帝王の支配権の象徴としての王笏であり、このKPMの場合は、ブランデンブルグ選帝侯の紋章に由来すると言われる。KPMの開窯は1763年

とされるが、その前史があるので少し纏めてみる。まず1751年ウエゲリーWegeliがベルリンに製磁工房を設立した事に始まり、一時は磁器焼成に成功したものの、1757年に閉窯する。稍あって、商人ゴツコウスキーGottskowskyが、既に閉窯したウエゲリー工房のライヒャットと絵付師クラウスと組んで、磁器工房を1761年に設立する。因みに、ウエゲリー工房で作られた陶磁器の糸底には〈W〉が、ゴツコウスキーの工房では〈G〉が標章として染付で記されたと言う。ゴツコウスキーは更にマイセンから名工を招き磁器生産に努めるが、運営資金の不足から

1763年に窯を閉じることを余儀なくされるのである。そして同年1763年に愛陶家であったプロイセンの国王フリードリヒ二世、通常フリードリヒ大王(1744-1786-1797)が、閉窯したゴツコウスキー工房を買い上げ、王立製磁工場とした。以上がKPMの前史と、その創設に関する知識であり、既に1909年ロンドンで出版された陶磁標章一覧の「ベルリン」の項に読む処でもある。フリードリヒ大王が大いに肩入れたKPMは草創期の頃から、ブランデンブルグ選



KPMのマーク(AN.1479)―糸底

帝侯が持っていた王権の標章であった「王笏」を王はその標徴として用いていたのである。

通常フリードリヒ大王で通るフルードリヒ二世はフリードリヒ・ヴィルヘルム一世の子であり、プロシアの国王である。シレジアとの二度の戦いで勝利を納め、プロシアとブランデンブルグ王国が合一し、加えて、ポーランドの一部をもその版図に入れてしまう。こういった広大で豊かな土地と、ヨーロッパ随一の強力な軍隊を背景に、フリードリヒ大王

は支配構造の近代化に着手すると共に、自らの考案した技術革新を実践に移すのである。一方では、〈哲人王roi-philosophe〉という綽名が指し示す如く、フランスの思想家ヴォルテールと書簡を交し、ヴォルテールをプロシアに招きもする。大王がフルートを奏でる図版は広く知られている通り、自らもその名手として君臨し且つ作曲も手がけた程である。戦の長であり、諸技芸と技術の発展を生み出した大王が、ポツダムの「オーネ・ゾルゲOhnesorge(無憂宮)」を輝かせていた時代が18世紀後半であった。そのような技芸愛好家の大王が陶磁方面に触手を伸ばすのも当然の成り行き

と言うものであろう。KPM、正しく「王立のköniglich(e)」と呼ぶに相応しい製陶工場が誕生したのである。

大王の死後も工場は運営され続け、1832年以後には、「王笏」に加えて皇帝の権力の標章としての十字架の付いた地球儀がKPMの標徴に加わる(AN.1478, 1479, 1668参照)。1872年以降には、「王笏」に「SgtP」が加えられた磁器が現われる。これは高温焼成磁器の開発者の名に因むゼーゲル磁器SeggerPorzellanを示すものである。「SgtP」な

る標しを付した磁器は我々の洋陶磁コレクションには見当たらない。以上KPMとその歴史を中心に、18世紀後半からの経緯を略述した。我々の洋陶磁コレクションの中に、KPM関係のものが少なくとも8点認められる。これらの詳細は文末に示す通りで、標本原簿に記入された内容からKPMと理解し得る記述は「Royal Berlin Vase」(AN.1668)を除けば見当たらない。加えて、磁器陶器の区別すらされていないのである。

抑もの処、明治から大正時代にかけての日本にあって、これらKPM磁器が如何なる理由で以て購入され、どのように教材や研究用資料(標本)に供されたのかは想像の域を出るものではない。先にも触れた通りHAND BOOK OF MARKS ON POTTERY & PORCELAIN (KIT-BN 8465)の出版年と購入時期から、先ずこの書物が当時京都高等工芸学校校長中澤岩太の発意により購入されたものであろうと考えられなくはない。中澤の専門分野と京都の工芸界での指導者としての地位から鑑みて、当然であろう。しかし、当時は、高等工芸学校に陶磁器学科なる学科は生まれていない。創設されるのは、1930(昭和5)年であれば、製陶磁用の標本とは考えにくい。製陶磁用の図案の為のものと考えれば、図案科のカリキュラムも読む通り、それは視野に入れても良いものであろう。1917年まで図案科の教育研究を指導してきた武田五一が、これらの購入を発意したのではないかと考えられるが、確証はない。武田が本校を去るのは1917年であり、明治



AN.1668



AN.1668―糸底

40年から教授陣の一角を占めていた本野精吾他が率いた武田以後の磁器に、KPM関係の充実が図られなかった事実から考えれば、当時学校の教官、研究分野で指導的役割を担っていた中澤と武田の両者による発意で購入が進められたのだと考えられないことはない。加えて先の書物の出版年と購入受入磁器か件の図書を基に、洋陶磁の収集に掛かったのではないかと考えられなくもないが、そこに網羅されている各案が一覧出来る程の標本が残っていないことから考えれば、その可能性は極めて薄いと

言わざるを得ないのである。最後に文末に示す文献Bに見る「Vasenpaar」(SS.132-133)は、AN.1668に認められる技法、エマイユによる盛り上げ等、形状の違いを度外視すれば酷似してはいる。しかし、「Vasenpaar」(Kat.No.91)の説明を読む限り、その制作者、制作年代に対する手掛かりは得られない。

AN. 1478	飾壺 (H:141; φ:65 m/m)	1911年7月4日高田商会より購入,	¥11.70
1479	飾壺(陶器彩画) (H:120; φ:112 m/m)	"	¥25.70
1480	猫置物(H:137; W:84 m/m)	"	¥ 6.90
1481	菓子器(陶器彩画) (H:55; φ:185 m/m)	"	¥20.46
1482	飾皿(陶器彩画-M15) (H:19; φ:260 m/m)	"	¥17.50
1483	コップ(陶器白磁) (H:133; φ:86 m/m)	"	¥ 5.85
1484	飾皿(陶器彩画-白磁草花透シ模様) (H:31; φ:214 m/m)	"	¥ 1.75
1668	Royal Berlin Vase (20774) (H:117; φ:186 m/m)	1915年4月27日三井物産神戸支店より購入,	¥10.86

参考文献

- A.: W. Burton & R.L. Hobson, Handbook of Marks on Pottery & Porcelain. MacMillan & Co., London. 1909. (p. 37)
 B.: Karl H. Bröham (Hrsg.), Kunst und Design 1889 bis 1939. Vom Jugendstil zum Funktionalismus. Berlin, 1993. (S. 81 sqq.)
 C. 日本陶器大辞典. 角川書店, 2002.(pp.468, 1237)
 D. Grand Usuel Larousse. Larousse, 1997.
 (「Frédéric I le Grand」(Brandebourg) (Prusse occidentale)の各項)
 (美術工芸資料館教授 竹内次男; 2006.10.25.)